

# 熊野川の舟運の歴史

熊野川の舟運の歴史は古く、中世に始まった熊野詣において、本宮と新宮間を熊野川を利用して船で行き来したという記録が残されている。江戸時代になると熊野三山への参詣は比較的少なくなったが、熊野川は紀州藩の街道整備の一環としての整備が進み、川の街道として物資の輸送が盛んに行われた。また、明治から大正にかけては、通船と呼ばれる客専用の定期船が本宮、新宮間を上下していたという。大正時代になると、飛行機のプロペラエンジンで熊野川を遡行するプロペラ船が開発され、新宮・本宮間を上航 2 時間、下航 1 時間半で運航を開始した。これらのプロペラ船は最盛期には、瀨峡や十津川村の折立まで航路を伸ばし、熊野川の沿川を結ぶ重要な交通手段となっていたが、昭和 30 年代からのダム建設ラッシュと昭和 34 年の川沿いの国道 168 号が全線開通したことにより国道沿いの航路は次第に衰退した。しかし、瀨峡への航路はプロペラ船をさらに改良したジェット船に姿を変えて、現在も瀨峡観光の主要な交通手段として、現在も運航されている。またかつて熊野川を行き来した川船も、熊野川の世界遺産の登録を契機に「観光川船下り」として再現され平成 17 年から運航されている。

また、熊野川流域においては、上流の山地で切り出された材木を、筏に組んで新宮まで流す、「筏流し」が古くから盛んに行われていた。筏の集積地であった新宮市の河原には「川原町」と呼ばれる町が形成され大いににぎわったが、陸上交通の発達とともに姿を消している。

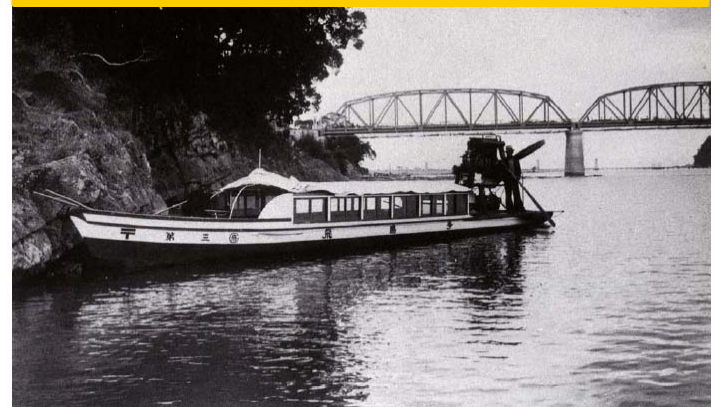
熊野川下り(一遍上人絵伝)



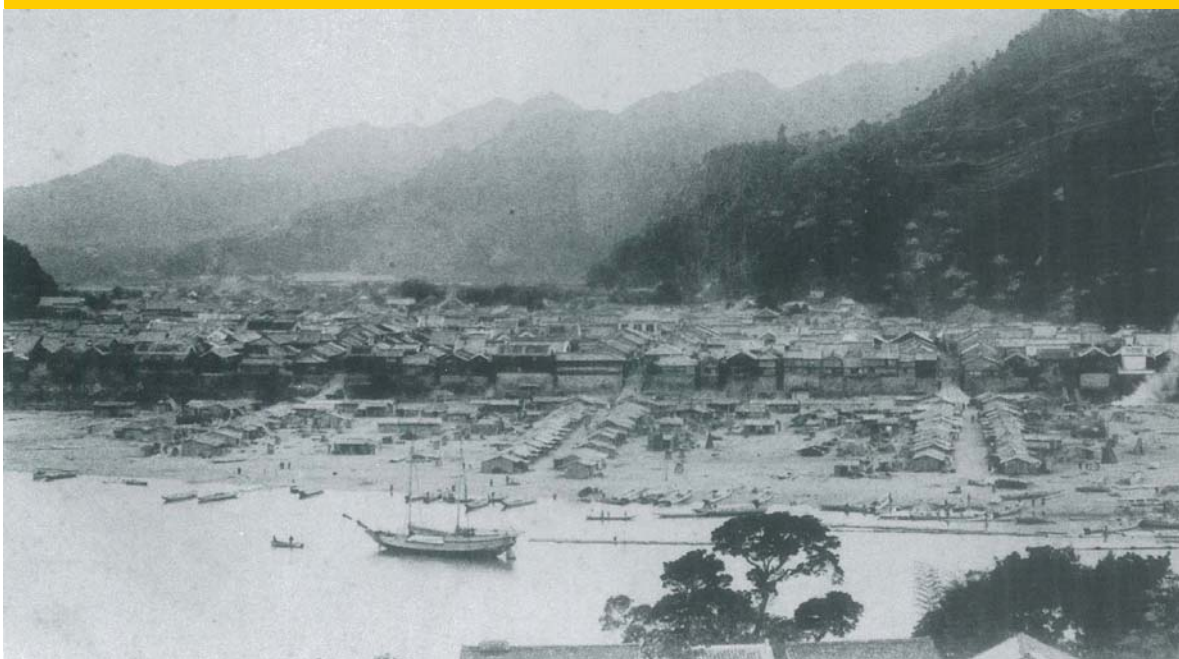
熊野川を往来した三反帆



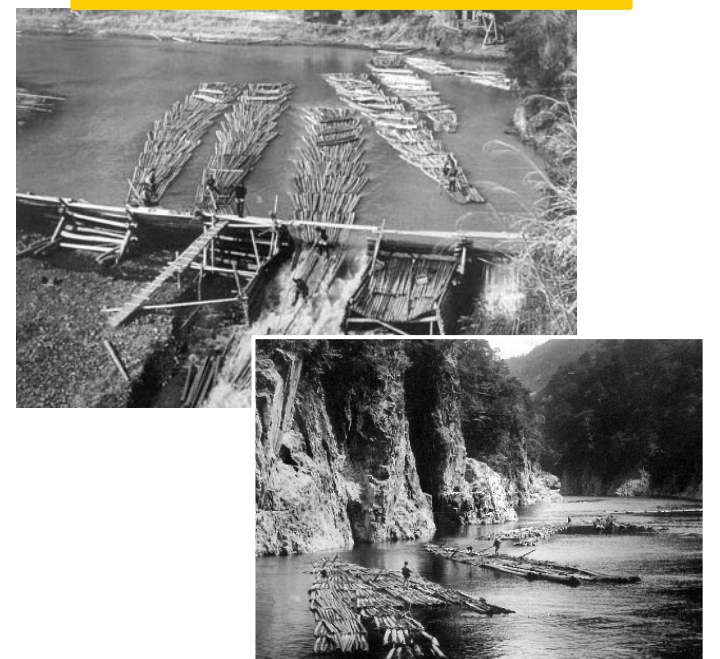
プロペラ船



木材の輸送で栄えた川原町(新宮市)



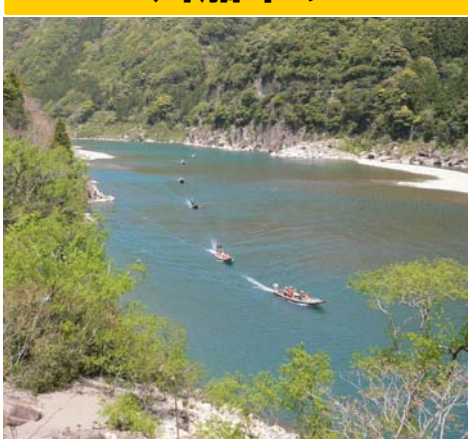
筏流し



ウォータージェット船



川船下り



観光筏下り

